

働き方改革は日本人の 全人生の幸福追求のはず

在仏コラムニスト 安部 雅延

退職後の人生の充実

今から30年以上前、経営コンサルタントをしている伯父から「退職してから第2の人生で何をしようかと考えるのは手遅れだ」と言われ、それを徐々に今実感し始めている。

筆者はフリーランスなので退職も第2の人生という区切りもないが、それでも自分が何をしている時に満足感を得られるかは理解している。

私の場合は、小学生の時から油絵を描き、画家になろうと思った時期

もあったので、40年前にやめた絵を最近再開し、結構楽しめている。それに20年以上、日本の美術新聞にパリの展覧会情報の記事を書き続けているので完全に離れていたわけではない。

20年前には、妻の郷里のフランス西部ブルターニュ地方で行われた国際絵画コンクールに飛び入りで参加し、賞と賞金を貰い、小さな満足を得たこともある。だから、どんなに疲れていても絵を描くと不思議に元気が出る。

それも画家をめざしていた頃は野心満々で、過去にない絵画様式を世に問いかけたいなどと息巻いていたが、今は無欲無心で観るモティーフに向き合い、素直に感動しながら描いているのがいいたかもしれない。楽しめなくなったら辞めればいい。

描いた絵は、迷惑を承知で親戚や知り合いにプレゼントし、喜んで貰っているのも楽しみの一つだ。人間にとってより多くの人に喜んでもらうことで得られる満足は、大きな生きる力になる。

残念ながら、長時間労働、過重労働を繰り返し、仕事中心に生きてきた多くの日本のサラリーマンにとつ

て、第2の人生を楽しんでいる人は少ないという。団塊世代が二挙に定年退職した数年前、第2の人生の過ごし方は日本でも話題になった。

人口が多く競争が激しく、高度経済成長期に酷使され、失われた20年で苦戦しながら生きてきた団塊世代は、現役時代に仕事以外で心の底から満足できるものを探し出せた人は少ないだろう。無論、その前もその後の世代も似たようなものだ。

最初は、毎日が日曜日と喜んでいたので、1年も経つと恐ろしい退屈をどう埋めるかで悩み始め、やがて高齢者のハローワークに通い働き始めた。無論、今は定年退職後に嘱託で会社に残るか転職して仕事を続けたいと考える人は少なくない。

30年前、定年退職後、妻や娘にパリに連れてこられた男たちが、妻たちが買い物する間、ベンチに寂しく座っていた姿をよく見かけた。彼ら「濡れ落ち葉」たちの姿は、今もそれほど変わっていない。

最近、電通に35年間勤める古い友人と会った。電通は女性職員の過労自殺以来、最終就労時間を午後10時と定め、それ以降は会社に残るこ

ともメールをやりとりすることも許されなくなったという。

この話をフランス人にしたら、10時という時間に呆れて笑っていたが、それまでは会社に泊り込むことも、土日に出勤するのも日常化しており、中には月200時間、残業していた社員もいたそう。

無論、電通のルーツは通信社だったこともあり、定時で働く業種ではない。批判はされないが、今でも新聞社やテレビ局は電通並の長時間労働をしている可能性は十分ありうる。しかし、それでも世界的に見れば異常な状態と言わざるをえない。

燃え尽き型人生の終焉

では、人生を楽しむ天才といわれるフランス人はどうなのか。一概には言えないが、日本人よりはるかに長い年平均24日間の有給休暇と、週労働35時間制（最近制度が崩れているが）で残業もなく、就業時間以外、仕事のメールのやりとりも禁止されているため、自分探しの時間はたっぷりある。

7月、8月には3週間以上の長期休暇をとるフランス人だが、祝日が

非常に多い5月などは、休みの合間に働いているような印象だ。事実、祝日と組み合わせて有休をとるフランス人は多いので、職場はガラガラ状態になる。

管理職には就労時間の制限は法的にないが、有休をこなさない人はいない。とにかく、残業をする社員は無能とされ、残業をさせるような上司もパワハラと見られる。いかに短い時間で多くの結果を出すかに集中している。

そんなフランス人は、週末や長期休暇のプライベートな時間を充実させることに余念がない。たとえばサイクリングスポーツが盛んなフランスで

は、100万円もする自転車を購入し、フランスのみならず、他のヨーロッパの国に出かけ、サイクリングを楽しむ。スポーツクラブも山のようにあり、そこの付き合いも盛んだ。

興味深いのは、夏の長期ヴァカンス先で、退職後の人生について情報交換している姿をよく見かけることだ。友人のマリ・エレヌは昨年、ヴァカンス先の南仏ドラギニヨンの滞在した貸別荘のオーナーに、老後の過ごし方の情報を熱心に聞いていた。

時々、フランス人の話を聞いていると、普通のサラリーマンが日本でいう退職後に働き続けることに興味がある人は、ほとんどいない。

一つ興味深いのは、退職後に人道支援などのボランティア活動を熱心する人が多いことだ。人に喜んで貰うことで心の若さを保てると彼らはいう。でも、そのボランティア活動も老後に始めたわけではなく、若い頃から週末や有給期間中にすでにしていくケースが多い。

これまで2回、国際医療支援団体、国境なき医師団のパリ本部取材したが、ボランティアが講じて専従者になった人は少なくないという。

ある財務担当者は、35歳まで銀行職員で週末だけ同団体で活動していたそうだが、銀行より国境なき医師団の活動の方が、はるかに満足度が高かったのだ。給料は半分になったが、専従することにしたという。「とにかく自分が誰かの役に立っていることを毎日実感できる」と今は非常に満足していると話していた。

日本人は働くことが信仰化しているようにも見える。つまり、働き続けなければ豊かな生活はできないという思い込みだ。フランス人は長期ヴァカンスでも、ホテルには泊まらないし、行った先でスーパーに買い出しに行き、お金は使っていない。

フランスなど他の先進国に比べ、日本人は今でも遊ぶことが非常にヘタだ。その原因の一つが、長期有給休暇が取れないことで、短い休暇に凝縮して楽しむために高額出費するケースが多いことだ。

もう一つの原因は、日頃から人生を楽しむことを養っていないこと。就業後や毎週末にもプライベートな時間があるわけだが、そこでの楽しみは、せいぜい飲食くらいで、フランス人のように毎週末、友人や親戚、近所の人を招いたパーティーを頻繁に行ったり、ボランティア活動したりしていない。

つまり、生活が仕事中心でメリハリがなく、それは仕事の効率化にも悪影響を与えている。なぜそうかといえ、まじめに働かなければ生きていけないと思いつ込んでいるからだ。

長期ヴァカンスや週末に人が消費することは、実は国全体としてお金が回ることを意味し、経済効果は大きい。企業が内部留保ばかりを増やしているのは、人間が中心ではない企業中心文化があるからだ。そんな文化を根本的に改めるのが、働き方改革の本筋ではないだろうか。

